

立山連峰のふもと
一面黄金色に染まる
家族と地域と手を携え
好きの気持ちを大切に
農業の楽しさを広めよう



海道 瑞穂 さん

富山県入善町

株式会社アグリたきもと 代表取締役

「農業を楽しくおしゃれに」という信念のもと24歳で社長に。会社のイメージカラーを田んぼに映えるピンク色にする。機械化を進め社員が働きやすいよう環境を整え、地域に根づいた農業に取り組む。





P19: 収穫目前の田んぼを背に海道瑞穂さん
P20: 一緒に働く仲間と。今では姉と妹夫婦も加わる(左上)
枝豆の生育状況を確認するその手の爪には、きれいにネイルが塗られている(右上)
瑞穂さんの相棒のトラクター。つけまつげをすると顔に見えてかわいらしい(右下)
ライセンスターの鉄骨には瑞穂さんが好きなピンクが塗られている(左下)



見渡す限りに広がる水田

ラグビーボールのような巨大スイカで有名な富山県入善町へ入ると、一帯はずっと水田が続く。入善町は、黒部川が形成した広大な扇状地で、日本海に面している。株式会社アグリたきもとの120畝ほどの水田でも、黄金色に輝く稲が頭を垂れ始めている。「明後日から稲刈りなんです」と迎えてくれたのは、社長の海道瑞穂さん(37歳)。

手渡された名刺は、シヨッキングピンクを配した若々しいおしゃれなデザインだ。

「私、ピンクが大好きで『会社のイメージカラーもピンクにしなきゃ社長はやらんから』って父に言ったんです(笑)」

進学した高校には農業科もあったが、農業が嫌いだった瑞穂さんは普通科へ。卒業後は念願のデザイン専門学校へ進んだ。

瑞穂さんが高校を卒業する2003年、営業職の父・瀧本敏さん(63歳)が脱サラして、兼業農家から専業農家となるや、地域の農家から田んぼの委託が次々と舞い込み、父だけでは手に負えない。その姿を見て、「手伝い程度ならば」と、専門学校卒業と同時に就農した。ところがどっこい。「父母と3人で全部の作業をやるんです。稲刈りが夜中の12時に終わって、じいちゃんの大工小屋で糶摺りをして、終わるのは夜中の2時という毎日。疲れ果てて家出したこともあるし、苦しくてピリピリしてた……」

そんな状況が続いたため、大型機械の導



左から、父の瀧本敏さん、海道瑞穂さん、母のみどりさんと。母のみどりさんは、働く環境をよりよくするための相談相手(上) トラクターをさっそうと運転する瑞穂さん(下)

入を検討。設備投資の必要性など将来の展望に立って父が法人化を決意したのは、10年のこと。

「先のことを考えて、自分ではなく娘を社長にしたいと思った。これからは女性だからできないという時代ではないので」という敏さんの意向で、瑞穂さんが代表取締役就任。弱冠24歳、しかも大規模農家では、県内初の女性社長だ。

「社長にすれば辞めないだろうと、父は内心思っていたのじゃないかな」と笑う瑞穂さんだが、「周囲で農業をしているのは年配の方が多かったので、私に加わったら面白いんじゃないかという好奇心もありました」と語る。

働きやすい環境を整備

まず、ライスセンターの建設に着工。稲刈り後の乾燥調整の重労働から解放されるために、最新の乾燥調整設備が必要だった。ライスセンターの中の鉄骨の色は、もちろんシヨッキングピンクを指定した。

「農作業所だけ働く環境は大事なので、『田んぼは緑なんだから、映える色はピンクしかない』と説得したんです」。ライスセンターに入ると、鉄骨の鮮やかなピンクが、生き生きとまぶしい。働く背中を励ましているようだ。

その2年後には、従業員用に仮設トイレではなく水洗トイレを設置した。「内装は女性用がピンクで、男性用は紫色です。内装が



屋敷もできるような敷きも備えた休憩室を備えている。2階は事務所として使用(上) 販売先が決まっている米は蔵で保管(下)

きれいだと、中もきれいに使おうという気になるんですよ」と瑞穂さん。

「農業は体が資本なので、環境をよくすることのでいい仕事ができる。そうすれば農業を継続していけると思っています」と。18年には、シャワールームなどを完備した男性用休憩室、2階には女性用休憩室と事務所を建設。

「トイレや事務所を新設したことで、周囲

からもちゃんとやっているんだな、というように見てもらえました」

農業を楽しくおしゃれに

現在作っているのは、コシヒカリ、ミルキークイーン、富山のブランド米「富富富」、大豆、ブルーベリー、ハウスネギなどだ。

就農当初、わずか1・5畝だった耕作面積は、現在は120畝の広さになった。毎年10

畝近くの委託が増えていったことになる。

「委託を断った田畑が放置されるのを心配して、父は全部受ける姿勢でいます。地域に根づいた仕事なんだからと言って。だから、大豆やブルーベリーなども、農地を引き受けてから作り続けているんです」

この地域は農地交換が早くから可能だったこと、また基盤整備も早期に実施され農地の大きさも大方決まっていたので、農地が分散することなく、管理がしやすいという。とはいえ、東京ドーム25個分もの広さだ。一日に4畝ずつやっても田植えも稲刈りもまるまる一カ月かかる。

トラクターやコンバインは不可欠で、瑞穂さんは、自分専用の大型機械を駆使しながら水田作業全般をおこなう。一日中、トラクターに乗っていることも多い。

「内装や外装も自分の好きなように替えたりします。ここ、見てください」と指さした先は、トラクターのヘッドライト。えっ！つけまつげ！ ショッキングピンクのボディに、長いまつげが揺られて愛らしい。トラクターは、まさに無二の相棒なのだ。

「まつげを見て、子どもが手を振ってくれているんです」とうれしそうに笑う。

「自分なりに楽しくすることがモットー」と語る手の爪には、カラフルなネイルデザインがしてある。「その爪で田んぼできるの？」って言われたら「こっちのもん。『ちゃんと農業できるよ』って答えます」

仕事が楽な冬季に、スクールに通って資

格を取得した。「農業者限定のネイルサロンを設けたんです。農業の話をやつくりしながら、爪にネイルを塗ってあげる」

「農業者として」という規制概念の枠を決して設けない瑞穂さんだ。真っ黒な土を相手に、きつくて汚くて稼げない仕事という農業への偏見を全部変えようと思ったそう

だ。会社のイメージカラーもトイレも休憩室もネイルも、すべて「農業を楽しくおしゃれに」という強い信念があるからこそ。

「最近、この辺りではトラクターに乗っている女性が増えました。米の農業法人の女性社長は3人。女性従事者も増えています」瑞穂さんの姿を見て、「瑞穂さんのようにやりたい」と志を抱いたに違いない。

「若い女性に少しずつ発信してきたけれど、間違いではなかったなと思えるようになりました」とうれしそうだ。

地域農業を前向きに捉え実践する姿が評価され、2017年に、全国優良経営体表彰の経営改善部門で農林水産大臣賞を受賞するなど、経営者としても確実に成長を認められている。

「何も知らなかったからできた。最初は吸収するので精一杯だったけど、毎日楽しいし、やっぱり自分が作ったお米が一番おいしい。消費者にも、このおいしいお米をぜひ食べてもらいたい。今では農業が大好きです」と語る。

(片柳草生／文 宮下直樹／撮影)